

日本カレドニア学会  
2015 年度大会プログラム  
— NPO 日本スコットランド協会協賛 —

日時 2015 年 10 月 10 日 (土) 10 時 00 分～ 16 時 40 分

会場 キャンパスプラザ京都 第 2 会議室

(JR 京都駅烏丸中央口より徒歩 5 分)

日本カレドニア学会  
Japan Caledonia Society

(大会事務局) 〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学文学部

鵜野祐介研究室

<http://www.ne.jp/asahi/caledonia/jcs/index.html>

Email: [y-uno@fc.ritsumeai.ac.jp](mailto:y-uno@fc.ritsumeai.ac.jp)

日本カレドニア学会 2015 年度大会プログラム  
— NPO 日本スコットランド協会協賛 —

日時：2015年10月10日（土）

会場：キャンパスプラザ京都 第2会議室（JR京都駅烏丸中央口より徒歩5分）

1. 受付開始 9時30分～

2. 開会式 10時00分～10時15分 司会 金津 和美（同志社大学）

挨拶 本学会代表幹事 一橋大学名誉教授 櫻井 雅人  
NPO 日本スコットランド協会 理事 清家 久美子

3. 研究発表 10時15分～11時40分

司会 吉野 由起（三重大学）

① ジョージ・マクドナルドの「北風のうしろの国」とケルト航海譚について  
長田 恵子（日本女子大学大学院）

司会 加藤 昌弘（名城大学）

② 権限委譲後のスコットランド政治と移民政策と世論  
高橋 誠（慶應義塾大学大学院）

—2015 年度総会— 11時50分～12時30分  
司会 川畑 彰（芦屋大学）

<休憩> 12時30分～13時30分

4. 講演 13時30分～14時40分 司会 金津 和美（同志社大学）

「伝承歌を研究すること」  
—アメリカ黒人霊歌にみる「表現」言説の壁と向き合いつつ—  
立命館大学教授 ウェルズ 恵子氏

5. シンポジウム 14時45分～16時30分 コーディネーター・司会 鶴野 祐介（立命館大学）

「スコットランド民謡の越境性と土着性をめぐって」

パネリスト 高松 晃子（聖徳大学）  
パネリスト 櫻井 雅人（一橋大学名誉教授）  
コメンテーター ウェルズ 恵子（立命館大学）

6. 閉会挨拶 16時30分～ 立命館大学教授 鶴野 祐介

\*懇親会 17時00分～19時00分 京都七条ワイン蔵しおり（080-5789-6884）、会費 6,000円  
（京都市下京区七条通新町東入ル西境町158）

<研究発表1> 「ジョージ・マクドナルドの『北風のうしろの国』とケルト航海譚について」

長田 恵子 (日本女子大学大学院)

聖職者であり、文学者であったジョージ・マクドナルド (George MacDonald, 1824-1905) は、『北風のうしろの国』(At the Back of the North Wind, 1871) の物語のプロットをケルト航海譚からインスパイアされている。航海譚にみる「ケルトの他界」は、楽園であり、生身の状態のまま行くことが出来、帰還することができる。また、ダンテの『神曲』の中にある「キリスト教的世界」との比較により「北風のうしろの国」とは、どこをイメージして作り上げたのかを探してみたい。またそこから見えてくるマクドナルドの死生観を追及する。マクドナルドは、故郷スコットランドにおけるカルヴァン主義からの圧力や19世紀の科学万能主義などによるキリスト教信仰への揺れを『北風のうしろの国』の中で、特にその死生観について、ケルトキリスト教的融和によって解消しようとしたのではないかと仮定してみる。

<研究発表2> 「権限委譲後のスコットランド政治と移民政策と世論」

高橋 誠 (慶應義塾大学大学院)

2015年5月7日に実施された総選挙で、議席獲得数では目覚ましい結果を得られなかったが、イギリス独立党の台頭が注目された。また、イギリス独立党の影響は検証が必要であるが、保守党の移民政策提言は2010年マニフェストに比べ、抑制的になった。つまり、移民政策の政争の道具化が見受けられた。しかしながら、スコットランド政党政治界では、よりポジティブな移民政策のコンセンサスが存在しているように見受けられる。本発表では、まずこの要因の説明を試みる。さらに世論調査では、イングランドに限らずスコットランドでも移民に対する世論の多数はネガティブであるにもかかわらず、スコットランドでは抑制的な移民政策を掲げる政党や急進右派政党への投票は比較的少数に留まっている。この点に関して、仮説的要因を挙げることが本報告の第二の目的である。これは、今次の総選挙におけるスコットランド国民党台頭とも無関係ではないと考えている。

<講演>

「伝承歌を研究すること」

— アメリカ黒人霊歌にみる「表現」言説の壁と向き合いつつ —

ウェルズ 恵子

民間伝承をルーツとする文化、あるいは民間での伝播普及がその存在価値を保証しているような文化を研究するときの大きな悩みは、文字か音声かに関わらず、編纂されたテキスト(研究素材)やその後のテキスト分析に様々なバイアスがかかってどこに「作者の声」があるのか見極め難いということです。民間伝承テキストに関する言説の多くは、テキストに保存された「声」が民衆のアイデンティティ表現、悲哀の表現、抵抗の表現、願望の表現など、なんらかの「表現」(expression)であったということを前提としています。そのような言説は、表現する主体と表現を受け取る客体との対面的な設定におけるメッセージ認知感に基礎をおくものであり、双方が自我ないしは人格をある程度確立していることが論理や感情の共有条件となります。ところが民間伝承では、言語動作が個人的自我確立以前の特質を見せることがしばしばあります。だとすれば、民間伝承に深く関連するテキストは、西欧文学研究とは異なるアプローチで理解や評価を試みるべきではないでしょうか。

民間伝承に関わるテキストの場合、少なくとも4者の「作者」がいます。伝承を担ってきた不特定多数の人々(歴史的コンテキストにおける作者)、活字になるテキストを披露した伝承者(個人的コンテキストにおける作者)、テキストの採取者と編集者(知的コンテキストにおける作者)、記録された伝承を意味付け言説化した人々(文化還元的コンテキストにおける作者)です。こうした複雑な成り立ちをしている伝承素材の研究は、ことに言語を介した伝達内容に関心の中心とする文学的アプローチの場合、テキストと研究者という1対1の研究姿勢ではない、むしろ没自我的な素材との関わりが必要であろうと私は考えます。

本講演ではこうした点について、アメリカ合衆国の奴隷制時代に発生したといわれている黒人霊歌の研究を例にとり、テキストに関する問題点や黒人霊歌暗号説などを検討したのち、伝承歌は表現(expression)というよりは表出(appearance)のアートだということを指摘してみます。さらに、私たちが非第一言語文化圏のテキストを日本で研究する意味についても、言及できればと思っています。

♪ウェルズ恵子氏 プロフィール♪

詩、歌詞、おとぎ話など、「声」や「音」と関係の深い文学の研究者。立命館大学文学部教授。対象はアメリカを中心とし、ヨーロッパ諸国やアフリカ、アメリカ先住民の歌と話にも関心がある。直近では、ブロードウェイミュージカルの発生と移民の伝承伝統について研究を夢想中。専門は口頭文化論、音楽文化、アフリカン・アメリカン文化、アメリカ文学・文化、比較芸能文化。主要著書に『フォークソングのアメリカ ゆで玉子を産む二ワトリ』南雲堂（2004）、『黒人霊歌は生きている—歌詞で読むアメリカ』岩波書店（2008）、『狼女物語』工作舎（2011）、『魂をゆさぶる歌に会う アメリカ黒人文化のルーツへ』岩波書店（2014）、等。

<シンポジウム> 「スコットランド民謡の越境性と土着性をめぐって」

「音楽は世界の共通言語」と言われるが、あらゆる音楽が世界中の人々に共通する感覚を与えるわけではない。ある歌が、特定の社会の人びとには郷愁や安らぎをもたらす一方で、別の社会の人びとにはエキゾチックな感覚を与えたり、騒音として拒絶感をもたらしたりすることもある。いわゆる芸術歌曲であれば、たとえ人びとに違和感や拒絶感を与えるような作品であってもコンサート等を通して他の社会へと「越境」することは可能だが、伝承歌の場合、それはまずあり得ない。伝承歌の「越境」が可能となるためには、伝えられた先の社会の人びとが、その歌を受け容れ、自分たちの社会に根づかせる、いわゆる「土着化」の過程が必要となる。このような「土着化」されたテキストを、スウェーデンの説話学者フォン＝シドウは「オイコタイプ」と呼び、伝承説話の越境性と土着性を論じたが、伝承歌にも一定の妥当性を持つ理論と見なされる。

今年4月に放映されたテレビ番組「題名のない音楽会」において、いくつものスコットランド民謡が明治以来日本に「越境」し「土着化」してきたことが紹介された。本シンポジウムでは、最初にコーディネーターから、「オイコタイプ」理論の概略と伝承歌研究への転用の可能性について述べる。次に、同番組に出演し詳しい解説を行ったにも拘らず収録後その大半をカットされるという苦い経験をされた高松晃子氏に思いのたけを語っていただく。続いて櫻井雅人氏に「Auld Lang Syne は世界を巡る」と題して、この歌が世界各地でどのように歌われてきたのかを、音声資料を用いてご紹介いただくとともに、この歌の「越境」と「土着化」が可能となった背景について説明していただく。短い休憩を挟んで、ウェルズ氏から三者の話題提供に対するコメントをいただいた後、フロアも交えた自由闊達なディスカッションの時間を取る。（コーディネーター 鶴野祐介）

- .....
1. 会員となられる方は、年会費として5,000円（学生は3,000円）をお納めください。
  2. 会員・非会員を問わず、参加費は無料です。
  3. 当日、学会誌 CALEDONIA のバックナンバーを、一部200円（最新号は500円）で販売いたします。
  4. 準備の都合上、出欠のご連絡を同封のハガキにて**9月18日（金）**までにお知らせください。
- .....

